

高山彦九郎集
高歌

高山朽葉集

復刊版

文學博士 福井久藏 著

高山彦九郎
歌集

高山朽葉集

山一書房刊行

群馬地域文化振興会

文學博士 福井久藏 著

高山彦九郎
歌集

高山朽葉集

山一書房刊行

高山朽葉集卷之六

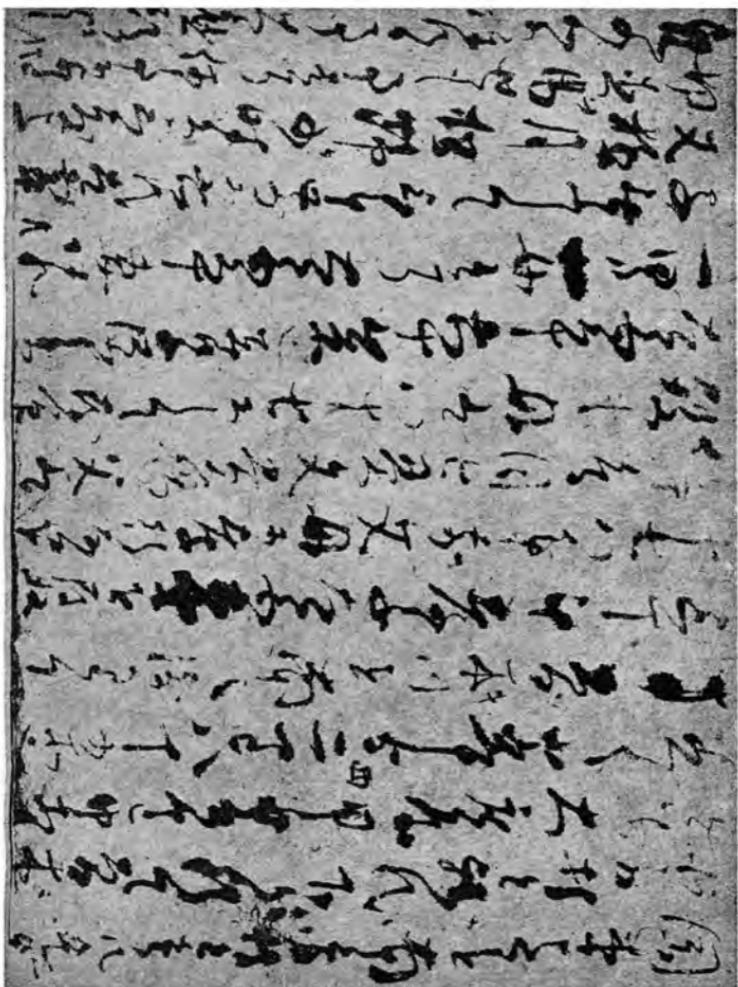
信濃 矢島行康編集

贈高山正之歌 并序十九首

ちり塚の序

高山正之

小さき塵埃もかいあつむるうまにくく是ひき
の山互はせひ度こりかすりなる名の流きも流
き流るよ志さうひて子尋の蹤ちとハ集けら
古く一今の人く世ふある留りも物の新羊比あ
ゆも小さくひて辨めける其くの云の景の塵埃
またいて不ろい久るん事を悟りみて目よふき



日豊肥族中 日記原本の一部 (有馬秀雄氏蔵)

謹みて本書を

矢島行康翁の墓前に捧ぐ

目次

序	〔一〕
凡例	〔一〕
解題	〔一〕
矢島行康翁小傳	〔一〕
高山彥九郎歌集	〔一〕
聖上御製	〔三〕
皇后宮御歌	〔三〕
高山朽葉集總目錄	〔五〕
高山朽葉集卷之一	〔七〕
高山朽葉集卷之二	〔二五〕
高山朽葉集卷之三	〔七三〕

高山朽葉集卷之四	[104]
高山朽葉集卷之五	[113]
高山朽葉集卷之六	[121]
高山朽葉集卷之七	[131]
高山朽葉集卷之八	[139]
高山朽葉集附錄	[140]
註	[146]
高山氏略系譜	[149]
年譜	[150]
海野訪問の記	[152]

附 錄

高山正之 寛政四年 日豊肥旅中日記	[17]
----------------------	------

序

高山正之先生の名は、國民學校の幼い子供でもこれを知らないものがあるまい。夙く西南の諸藩に勤皇の念を吹きこまうとして東奔西走、遂にその志の酬いられぬを慨いて久留米に於て自盡されたのは洵に惜しいことであるが、これによりて後進に一層その精神を鼓舞した力は尠しとしないのである。

三條大橋の上に坐し皇居を拜し奉りて涙を流したのは、泣き癖のあるためでもなければ奇を好むためでもない。寛政の三奇士とたゞへる奇の字を私は好まぬ。松籟艸に

大御門そのかたむきて橋上に頂根うねね突きけむ真心たふと

と橋曙覽はうたつてゐる。げにその通りである。祖母の喪にあたり、上州は太田の金山の麓にあるその墓側に假庵をつくつて三とせの喪に服したのも、賣名のためにする輩とは、天地霄壤の差がある。

上州は長脇差の徒が多いといはれてゐるが、安政の獄や坂下門の變をみても、立派な

勤皇の士が出てゐる。關邪論を著した大橋訥庵や兒島草臣の如き男子ばかりでなく、女流にも範と仰ぐべき婦人を多く出してゐる。倭文舎集をみると大橋卷子は、夫の精忠を思ひ浮べて、

天翔る魂のゆくへは九重の御階のもとをなほや守らむ

と詠じてゐる。手弱女でもかういふ風な心地をうたつてゐるのはその家庭の教育、溯ると郷土の先進の感化が與つて力があると思ふ。

和歌は國民文學として長い長い傳統をもつてゐる。これに因はれてはならないが、傳統の尊さを古い歴史をもつてゐる我が國民の如く切實に感ずる民族は少いと思ふ。ことにそれが勤皇家の心裏から流れ出たものであるときは一層みつしりと後の國民の心をとらへる。私は大分夙い時代に「勤王和歌集」を撰んだことがある。また昭和の早い頃に「近世和歌史」を出しその始に

いにしへの道わけわびてゐる喪屋のとまよりもれて雪はふりけり